

られたのである。

昭和二十年八月十五日終戦となり、十月には会社もついに解散となり、まもなく大連市へソ連兵がきて、日本人の家財道具を略奪しはじめ、婦女子には暴行すると云う生きた心地のしない混乱状態になっていた。

父親は後妻をもらい、子供がひとりできていたので、充さんは会社の寮に住んでいたのであるが、二十年末のある日、突然、日本人は夕方の船で日本への引揚げ命令が出され、家族の者との連絡もとれず父親たちは、充さんを残して引き揚げられた。

残された充さんは知人のいない異国で、自分の身を守るため必死になって働いた。

そのうち一人の中国人に助けられ、生きるため、昭和二十一年二月結婚された。三人の子供にも恵まれていたが、充さんが四十五歳のとき御主人が亡くなり、三人の子供を抱え苦労は絶えなかった。

望郷の念がかない昭和五十年一時帰国ができたが、先に帰国した父母はこの世にはおらず、故郷の土に骨を埋めたい一心で、昭和五十七年永住帰国をし、長女

一家、次男一家、長男一家を呼び寄せ、全家族そろっても種々の問題で苦労が続いているが、安住することができたと言っておられます。

(石川県引揚者更生同盟

会長 久木 孝作)

北満捕虜收容所逃亡記

石川県 川端 善一

昭和二十年六月、北満にも遅い春が訪れ、道端にも小さな花が咲き始めたころ、人々は、半年間の閉じ込められた生活から解放されて、伸び伸びとした生活に戻れるのである。街に沿って流れる松花江を渡り、中ノ島に遊びに行く人が多くなる季節でもあった。ラジオからは毎日のように、激戦や玉砕のニュースが、『海行かば』の音楽とともに流れていたが、北満ではそれほど緊迫した様子もなく、平穏な日々が続く配給品などにも変わりはない。しかし、早朝に行う軍

事教練は、在郷軍人や一般男子でも厳しく続けられていた。

私は、当時滿拓佳木斯地方事務所勤めていたが、七月に入って間もなく総務課の山川君と共に開拓團入植の諸問題で本社に長期出張を命ぜられて、新京にいった。七月二十日ごろには帰れる予定であったが、召集されて入隊する者が多くなり、仕事も進まず、帰る予定も大幅に遅れていた。本社内の慌ただしさを異様に感じていたとき、総務課長から突然、帰所命令が下った。私たちは急な話にとまどったが、とにかく荷物をまとめて駅に向かった。

駅前広場には兵器を持った部隊が待機しており、駅内はごった返していた。切符を買ったものの、時間どおりに汽車がホームに入ってこない。駅に入る汽車は軍用列車が多く、兵隊を乗せては北方に向かって発車する。たまにくる一般客車には、乗ることができないほど満員であった。駅員に相談しても「このとおりでどうすることもできないでいるんです。今度入る貨車は吉林方面に行きますから乗せてもらって、乗り継い

で行くしかないでしょう」と言われた。

貨車が入ってきたので、無断で無蓋車に飛び乗り、荷物が積まれている後方の空間に、身を縮めていた。

だれにも見付かることなく、貨車は順調に進んでいたが、軍用列車が通るたびに駅構内に停車していた。吉林を過ぎたころは薄暗くなっていた。途中、何度か軍用列車に追い越される音を聞きながら眠った。朝方寒さで目が覚めたときは、貨車は停車中であった。列車の通過待ちと思っていたが、太陽が昇っても発車しないので、眠っていた山川君を起こして、頭だけを出してそーっと駅を見ると、延吉であった。よく見ると駅から離れている所に我々の貨車は停車している。

降りて駅の中に入って見ると、どこから集まって来たのか満員だった。皆、不安な顔つきで、落ち着きもなく殺気だっていた。駅員は、「ソ連軍が国境を越えて攻撃してきたので、ただ今、日本軍が応戦中である」と話し終わると駅長室に消えた。関東軍の強さを知っていたので、そのうちに、追いつ返すであろうと思っていた。不可侵条約を破ってソ連軍が攻撃してくるとは

思いもよらず、なにか不安を感じた。一日も早く佳木斯に行きたかった。

線路を歩いていれば汽車がきたときに乗せてもらえ
ると、線路上に降りて歩き出した。だんだん歩く人が
増して十数人の集団となった。次の駅を通過するころ
には、近くの部落民が集まり、異様な目で我々を見て
いた。危険を感じて歩を早めた。疲れてきたのか後方
が遅れだした。余り離れすぎると、危険であることは、
先ほどの人たちの行動で感じられた。皆疲れきってい
る。早く泊まるところを確保せねばと話をしていると
き、後方が騒がしくなった。見ると二十人ほどの満州
人が荷物を略奪して逃げるところであった。取られた
物は子供たちを買った洋服だと女の人が悔しそうに語
るが、けがが無かったのが幸いだった。弱い人たちは
前に出して歩き出したが、朝から食事らしい物は口に
していない。食べられる物は土産物でも出し合って、
少しずつ食べたが満足するほどではなかった。

薄暗くなるころに葦子溝駅に着いた。駅長に理由を
話し、駅の中に入れてもらうことができた。駅長は我々

に答えた。「南下する汽車はあっても、北方に行く汽
車はないでしょう。電話では各方面で満州人の暴動が
起きているそうですから、気を付けてください」私も
先ほど略奪にあったことを話したが、これから先のこ
とが案じられてきた。駅の人たちからおにぎりをいた
だき、久しぶりに米飯を口にした。

疲労困憊で、ごろりごろりと駅で全員横になってし
まった。電話の音で目が覚めた。駅長が電話に飛びつ
いて聞いていたが、足が震えていた。何か起きたこ
とを直感した。「皆さん、今、牡丹江から連絡があり
まして、今朝ほどソ連軍の戦車が街の近くまで侵攻し
てきたそうです」

余りの侵攻の早さに驚き、日本軍は何をしているん
だろうと思ったが、事実はどうすることもできなかつ
た。これからの行動を話し合った。これから先は敵の
中に入るようなものだから危険だ。私たちは、山道に
入り、開拓団に行き食糧を確保することにした。その
後は状況を見て判断することになった。一緒にいた人
たちは延吉に行く人、北朝鮮にわたり船で日本に行く

という人と、ばらばらになって別れた。駅長に近くの開拓団を聞いたが、よく分からなかった。山の方を指さして、この先に間道省百草溝ひゃくそうこうに行ける間道があるはずと、教えてくれた。

食べ物をいただき、細い道を山の中に入ってみたが、木の枝などで歩きにくかった。枝を折りながら進み、昼近くにきれいな小川の所で食事をとった。静かで下枝の少ない木の間から見える風景は、侵攻など忘れさせた。明るいうちに道を捜さなければならず、休みなく歩いたが、進むにつれて獣道となってしまう。流れのそばを寝場所に決め、枯木を集めてリュックサックから書類を取り出して火をつけた。薄暮とともに最後のおにぎりを食べ、水を飲み、満腹感を味わう。夜半に火が消えないように、大きな枯木を入れると、火势が出て水面を照らした。静かな山中に木の燃える音が、水の音にまじって木の間に響く。

午前中歩き続けて農道に出た。百草溝に通じる道か、見分けがつかなかったがそのまま進むと、四キロほどの所で、馬車に荷物を積んだ老人や女性、子供たちの

一団に出会った。我々を満拓の人と知って安心したのか話し始めた。「今朝、ソ連軍が牡丹江に侵略し、街は火の海になっている。南下して延吉に行くよう命令があったので、若い人たちが残り、私たちが先に南下するところです」「私たちは延吉から来て佳木斯に行く予定でしたが、ソ連軍の侵攻で行けず、いったん開拓団に入るつもりで来ました」と話すと、老人は手を横に振って話し出した。「私たちが決して必死になって造り上げた開拓団ですよ。離れたくなかった。牡丹江の近くの開拓団では、戦争で滅茶苦茶にされたと聞かされて、やむなく南下しているのに、二人だけで開拓団に行くことは無茶です。その前に暴動でやられてしまいますよ。食糧を分けてあげますから一緒に延吉に行きましょう」とすすめられ、野宿を重ねつつ延吉に来て見ると、ソ連軍や満軍の暴動で街に入るところではなかった。

食糧をわけてもらい再び山の中に入って行った。途中で、兵隊と会ったが司令部からの命令が無いので、どこに行ってもよいやら困っていると、やけ気味に話し

ながら行ってしまった。兵隊の後について行けば、暴動には心配ない。われわれは後を追った。兵隊たちと野宿をしながら三日間が過ぎたころ、兵隊たちは通化を目指すことになったので、私たちは別れたが、名も知らない山から山への避難だけに食糧も無くなり、満州人の畑を荒らすことになった。その度に銃声が聞こえるが、弾は空高く飛んでいくので心配はなかった。ソ連軍にはおかしいが、農民に銃があるはずがない。分らずに撃たれ続けた。馬鈴薯やトウモロコシを取って山に入り、焼いて食べることを繰り返して数日が過ぎた。

名も無い山を越え、名も知らない部落を通り、月日も忘れ、ただ逃げて、食べることにしか考えつかなかつた。考えることもできないほど疲れきっていた。それでも思うことは家族のことである。年老いた両親が同じ苦労をしていると思うと、休んでもすぐに立ちあがり歩き出す毎日だった。新京に行こうと言う彼、今となっては遙か遠い所となっている。とても歩いて行ける場所ではない。悪いけれども、畑に作物がある以上

餓死することはない。いつまでも農民が許してくれないだろうが行ける所まで行こう。

終戦も知らなかった二人は、飢えに耐えかねて様子を見ながら畑の中に駆け込んだ。トウモロコシを取り始めると、パンと近くで銃声が聞こえ頭上すれすれに、うなりを立てて弾丸が飛んで行った。身を隠したが、すでに遅く満州人の農民に囲まれてしまった。村長らしい男が日本軍の三八式歩兵銃を持っていた。村長は「戦争は終わった」と教えてくれた。今まで緊張していた体から力が抜けてしまって、座り込んでしまった。苦労して来たのはなんだったのか、終戦の悔しさと共に涙が流れた。

それから農民に連れられて収容所に入れられたのである。

侵攻は戦車だけに早い。兵隊と一般人は道路を避けて、山に入らざるを得なかった。山の中にいる人たちは終戦のことは知らない。時々銃声が聞こえるから、なおさらである。ソ連軍と中国兵は、日本軍の襲撃を恐れて威嚇的に発砲する。昼夜を問わず銃声が収容所

に聞こえてきた。

昭和二十年八月二十五日、収容所での初めての夜が明けた。小学校の体育館が収容所になっていて、一般人と兵隊が一緒になり、雑魚寝の状態で、生活していた。小さな町にはソ連兵が少なく、駅の警備だけはソ連兵が主になっているらしい。あとは中国兵にまかせているようであった。収容所監視は中国兵だけであったから、余りきびしくはなかった。学校前の住宅に住んでいた人は、そのまま住んでいるようであったが、姿は見えなかった。避難民と武装解除された兵隊と合わせて、百人以上の大集団となっていた。収容された順に、中央の道路を通り奥の方につめこまれるのである。長い間、洗濯もしないし、風呂にも入っていないから、異臭を放っていると思うのだが、自分も同じ生活をしてきただけに、感じなかった。男は髭がのび放題で、女性は垢だらけの顔、中には鍋ずみでも塗っているのか黒い。これが権威を誇っていた日本人、とは思えなかった。

夜は高いところにある電灯一つだけで、薄暗く、気

味の悪い大部屋となって、子供の泣き声が、ひどく響く。入口の方が、ざわざわとうごめくと、「いやー助けて」の悲鳴があがる。胸のつまる思いである。隣にいた兵隊が、声をこぼして、「また来やがった。毎晩なんだよ。銃さえあればあんな奴、ぶち殺してやるんだが、残念だ」と体を震わせて、歯ぎしりをする。薄暗い中にソ連兵の姿が見えた。初めて見る「マンドリン」と呼ぶ自動小銃を肩からさげているので、どうすることもできない。「日本人の中にも強い人がいるんですね」と兵隊は話し続けた。「通って来た小さな町の出来事です。ソ連兵の余りのひどさに耐えきれなくなった日本人が、ソ連兵の自動小銃を奪って殺し、家の二階に上がり、階段を上ってきたソ連兵を撃ち殺して、自分も撃たれて死んだ、という勇敢な男の話を聞いたときは、これぞ日本人だと、胸がすーっとしたよと話し終わった兵隊は、自分のふがいなさに、いらいらしているようだったが、暗闇の中でいつしか寝息が聞こえてきた。

昼間は、入口で門の方を向いて、中国兵が三人座っ

ているが、いつも話に夢中になっている。のんびりした警備であった。裏口からは自由に出入りができるが、だれも出て行った人がいない。見付かったときの処罰が、こわいからである。満拓社員である我々は、収容所の前の社宅が満拓社宅ならば、佳木斯の状況を聞きたいと思っていたので、気になっていた。社宅に行くには監視所の前を通らねばならない。まもなく、社宅に行ってみることになった。収容所の人たちには、わからないように裏口から出たが、校門の通過がむずかしい。植木のしげみを利用して、監視所のすきを見ては校門を一人ずつ通りぬけた。道路に出て、一番近い社宅に飛び込んだ。四人いた女性が、一斉に顔を向けて、驚きの声をあげた。その家の主婦らしい四十代の婦人が「良く出てこられたわね。早く入りなさい」と言い終わらぬうちに。戸の近くにいた女性が「重戸を閉めてくれた。私たちは満拓社員であることや出張中の出来事を、かいつまんで話し、家族さがしに新京に行きたいので、協力願いたいということを出ると、「満拓社宅ではありませんが、私たちも主人が召

集されました。今後のことを相談していたところなの。お互いさまだから協力します」との力強い返事に、顔を見合わせて喜んだ。収容所での様子を話したあと、「早く出ないと、どこかにつれて行かれるから早く逃げなさい」とすすめられた。余りの急な話なので収容所内での、噂話として「ソ連からの話ですが、日本兵は一番先に日本に帰すとの伝達に、お先に帰りますと大喜びでいます」と話すと、それはあやしいと言わんばかりに顔を横に振った。私たちも収容所を逃亡して、家族を捜す決意であること、それに、家族は新京の本社に向かっているであろうから、まず新京に行きたいと相談した。女性たちはしばらく考えていたが、私の隣にいた主婦が「いつ逃亡を実行するの。今ならば隣が空き屋になっているから、そこに隠れなさい。布団もあるから」と、協力してくれた。場所を教わり今夜決行することを話して、収容所の夕食の準備のどさくさに紛れて、収容所内に入った。

夕食が終わって寝静まったところを見計らって、抜け出し空き屋の勝手口から入った。暗闇の中で窓から差

しこむ月あかりに部屋の中が見えてきた。布団も出ている。同胞の温かい気持ち胸をつく。避難以来、初めて布団の上に寝た。おにぎりの差し入れて二日間を過ごしたが、収容所ではなんの騒ぎもなかった。三日目の昼に、収容所の男たち全員が荷物を持って出て行くと、窓ごしに話してくれた。夜になっても収容所は静まり返っていて、帰って来た様子もなかった。表に出て見たが収容所の明かりもなく、満点の星だけが輝いていた。翌朝、満人服が勝手口に置いてあった。着替えて駅に行く、「今なら駅員は日本人だから相談してみるとよいですよ」と教えてもらい早速駅に向かって歩いたが、銃声に驚き首をすくめたが、威嚇であることを思い出して笑い合った。

駅に着いてみると駅舎の中まで人であふれていた。終戦後は、日本人が小さくなって生活し、満州人をよけて通らなければならなかった。職業がら満州語は知っていたが、彼らほどではなかったから、いくら満人服を着てもすぐ日本人であることが分かってしまう。駅の窓口で、駅長に新京行きの切符をお願いしたが、

「今日は終わりです」と窓口を閉めながら、「朝九時に汽車が入ります」と言いながら奥に入ってしまった。今まで同胞の温かい気持ちに支えられていただけに、余りのことに驚くとともに、憤りを感じた。満州人たちの前だから、とった行為であろうと、お互いに納得し合って、社宅に帰ったが、収容所には出て行った男たちの姿はなかった。私たちが逃亡する前日に、喜ぶ兵隊たちに「不可侵条約を破るようなソ連の言うことを信用しないように」と言って出てきたのだが、今となっては本当に日本に帰れることを、祈った。

翌朝、皆さんに別れを告げて駅に向かった。駅内外にあふれる人たちの間をぬって、駅長に切符二枚をお願いすると「危険だよ」と言って出してくれた。駅構内には思ったよりソ連兵が多かったし、警備も厳しかった。倉庫の裏に姿を隠して、汽車を待った。定時刻を少し遅れて入ってきた汽車に、切符も切らずに反対側から乗ったので、腰を下ろすことができた。間もなく満員になると、私の脇にいた満州人に右ももを蹴られた。大きな声で、席をあけろとの動作だったので、次

の客車に移って、大きな荷物の陰に隠れた。駅長が、危険と言った言葉が現実になってきたと思つて警戒した。速度を増すレールの音を聞きながら、彼らの攻撃に対策を考えた。

日本人とわかっている以上、多数で攻撃してくるだろうから、一人ずつしか通れない場所を選ぶことにして、客車と客車の連結の所で待つことにした。一対一ならば負けない自信があったので、少し落ち着いた。

汽車は二駅を通過して鉄橋を渡り始めたときに、不安を感じて、身構えたが、何もなく敦化に着いた。構内には多くの避難民がいた。聞こえてくる言葉は懐かしい日本語だったから、身を乗り出して日本人を見たときは、百万の援軍が到着したような心強さを感じた。

山川君も嬉しかったのか、大きな声で「これで助かった」荷物の陰から出てきて大きく深呼吸をしながら叫んだ。助かったと思つた瞬間、緊張感がなくなり、苦しかった夜のことが思い浮かんだ。

ソ連戦車の進行が早かつたために、町という町にはソ連軍がいて、町に入ることは死につながつた。やむ

なく山から山への避難に身も心も疲れはてた夜、屋根の崩れ落ちた山小屋に入り、壁に寄りかかつて座ってみると、風だけでも防げたのが嬉しかった。暗い夜空に満点の星の輝きが余りに美しかったので、逃亡をして避難のことさえ忘れて、しばし見とれていた。いつか子供のころの思い出につながっていた。父と別れ一人馬車に乗せられ家路を急ぐ途中、眠くなり横になると、馬車の両輪で小砂利を砕く音を聞きながら、星の上に星が重なるような光景が思い出され、懐かしく思えてきた。北満の夜の冷え込みは、慣れている私でもこたえる。暖をとることはできないから、一睡もせずに朝を迎えたが寒さのためか、節々が音をたてた。思い出にふけていたが、どこどかと入ってくる足音に我に返つた。避難民の人たちが乗り込んできたので、私たちも一緒に客車の中央まで入り通路に座つた。私たちが一緒にいることをだれもが気にもしなかったから、安心して話し合えた。長い間野宿をしながら、ある時は暴漢に襲われて、死亡した人の話を涙ながらに語る。初めて知る敗戦国民の苦しみ、祖国を思う避

難民を乗せた汽車は、順調に進んだ。安心しきった顔で眠ってみる夢は、祖国の姿か、それとも避難途中の苦しみか、汽車は平和な音をたてて進んだ。

吉林駅到着は夜半になっていた。駅の中央に集まり荷物を置き座る。ここが今夜の宿になるのだが、周りにいて荷物を取ろうとする満州人たちと、警護するソ連兵がにらみ合っていた。それでも隙をみては略奪しようとして、手を伸ばす。油断も隙もあったものではなかった。時間がたつにつれて略奪者が近くにいることも忘れ、荷物によりかかって眠る人が増えてくる。その周りをソ連兵が監視する。そのソ連兵が、一人一人起こしては、時計はないか、万年筆はないかと略奪している。私たちは武装解除のときにすべて取られていたから、ソ連兵も寄ってこないし、時間のない生活をしてきたから、時計がなくとも不便はない。ソ連兵は、時計一つ持って行けば一生暮らすことができるといわれているから、彼らも真剣である。持っている者は片腕に五つも着けているが手巻時計が止まると、壊れたと捨ててまた略奪して着ける。ソ連は軍事産業のみで平

和産業は無かったと話す。

朝になっても略奪者たちは、獲物をねらう豹のように荷物をねらっていた。九時ごろ汽車が入るとの連絡があつて、各人荷物をまとめて出発準備をして待った。乗車の合図に荷物を持って駆け出して行くが、荷物の多い人や重い人は遅くなる。遅くなった人をめがけて略奪者が襲う。放すまいとするから殴る蹴るの暴行を受ける。重い荷物は引きずって行くのだが、数歩も行かないうちに取られてしまう。私たちは、最後に残って運れる人たちを手助けしていたが、何力所もの略奪にはどうすることもできなかった。「急ぎなさい。危ないから荷物を捨てなさい」左右に走りまわったが、手が届かず数人の荷物は取られてしまった。最後の人を守り汽車に乗り終わったときは、私の服も破れていた。けが人がなかったのが幸いであつた。

話題は略奪の恐ろしかったことであつた。皆さんからお礼の言葉があつたが、「敦化から皆さんの中に入れてもらえなかったら、私たちは生きていられなかったらどう」と、お互いに苦難の道のりを語り合った。

安心感とレールの単調音で眠りに入ってしまった。私たちもいつのまにか眠っていた。車内の騒音で飛び起きた。今までの環境がそうさせたのか、音には敏感になり過ぎていた。新京が近いのであろう。周りは降りる準備をしているところであった。

新京から出発して途中でソ連軍不法侵攻により苦労して再び出発場所に避難民と一緒に降りようとしている。苦労の道順を思い浮かべているうちに、汽車は順調に新京駅に到着し、駅構内に入ってみると騒音のなかでの出発したときは、まるで違って、静かなのが異様に映った。新京にも暴動や略奪があったのか不思議に思えた。市街地も、なにもなかったかのように平和であり、一人歩きも平気であるのに反し、吉林から北滿の土地を、生命の危険を感じながら、裏道から山の中を歩いて来た私にとって同じ国の出来事なのかと感じざるをえなかった。終戦の年の七月、ある軍人から「家族がいるならば南滿に移動させなさい」と言われた言葉を、今しみじみと感じ後悔の念におそわれて、悔し涙が流れた。

様子の変わった町を通り本社に着いたが、南下した社員が多いのか、人影はまばらだった。「佳木斯の人たちからの連絡はありませんが、本社に向かってはまずです。必ず連絡があると思います。連絡があり次第お知らせしますから、独身寮でお待ちください。特に北滿は治安が悪いといわれていますので行かないでお待ちなさい。もし行き違いになりますと大変になりますからね」と親切に言ってくれたが、北滿の治安の悪い実態をいやと云うほど見てきた私にとっては、じつとしていえることができない気持ちであった。今でも虐殺、略奪、強姦が平然と行われていることを思うと、平和の中で生活している人たちにはわからないであろうし、知っていても漠然としか知りえない。私も南滿の平和に接しているならば、いつかは遠い国の夢物語のように、薄れて行くかもしれない。

短い期間であったが、共に苦労し、そして死線を越えて来た友人は親戚を頼って緑園地区に行ったり連絡が取れなくなった。私は佳木斯時代からの友人宅に身をよせた。一週間たっても連絡が無いので、本社に

聞きに行ったら確実なる情報が入ってこないが、綏化まで来ているらしいとの話だった。両親と妹と一緒にいるはずだが、心配の余りいたたまれずに、綏化行きを決意してハルビン行きの汽車に乗った。ハルビン事務所には連絡員が残っているから、情報を聞きその上で綏化行きをきめること、ハルビンも治安が悪いから裏通りには入らないことなど、本社で細かく聞いてきたのだが、今度の旅は一人だけに不安であった。吉林から新京に向かった時のあの略奪後の乗り心地と、今とは天と地ほどの、違いであったが、敗戦国民は立たままの旅をさせられた。

ハルビンの大通りは不安はなかった。事務所には若い社員たちが三人いた。佳木斯からの人たちが綏化まで行く決意であることを話し協力を求めた。話を聞いていた一人が、「来てもらって良かった。今朝連絡員が来まして、確かに綏化にいますが、二日か三日のうちに新京に向かって出発するとの連絡がありましたから、行かずに新京にお帰りになったほうが良いと思います」との情報に、来て良かったとホッとした。帰る

前に懐かしい松花江を訪ねた。鉄橋がどうなっているかを見たかったことと、私の上司であった海野さんが汽車でソ連に送られる途中、ハルビン鉄橋から松花江に飛び込んで逃げ帰った話を聞いたからである。

再び新京にもどった四日目の午後、駅前広場に疲れた顔の家族と再会した。数カ所の社宅に分散して別れて出発した。私たち四人は孟家屯社宅に住むことになった。元氣だった父も、避難により体調をくずし、孟家屯に着いたときは心身共に弱っていた。新京に住んでいた人は物を売って生活できたが、私たちは明日からの生活を心配せねばならなかった。ソ連軍の使役があったので、その日の生活はなんとかできたものの、病気の父までは手が届かなかった。日ごとに衰弱して行く父を見るのがつらかった。夜は全員で煙草巻きで夜中まで頑張った。寝ている父も生活状態を知っているだけに、手助けしようと思き上がるが、何分も持たずに床の上にくずれてしまう。

その父も昭和二十年十月末に、やせ細ってとうとう息を引き取った。葬式などできようはずもなく、浅く

掘った穴に埋めた。孟家屯の生活もしばらく続いたが、益満さんの厚意で市街地の平屋の社宅に同居することになった。引越しても生活は同じ、夜は煙草巻き、煙草葉が無くなると危険をおかして満人街に買いに行くと。

この繰り返しが続いた昭和二十一年春ごろに、引揚げが開始された。せめて父の遺骨だけは持って帰りたいと母と話し合ってみたが、どうすればよいか分らない。友人に相談すると快く引き受けてくれた。友人は慣れた手つきで燃料を積み上げて遺体を乗せて、「君が、火を付けなさい」と、言った。友人は戦争中、戦友を焼いて遺骨を持って帰った話をしてくれた。平和だったとしても実父を焼けるものではない。戦争という荒々しい生活の中で、良心が麻痺したのか。なんでもできる戦争の恐ろしさを感じた。

満州を後にして、日本に上陸し故郷に帰ったのは昭和二十一年の初秋であった。その後、母も亡くなり、我が家では異国での終戦の苦しみを体験したのは妹と二人きりになった。もう二度と経験したくない。

【執筆者の横顔】

川端氏は若くして両親と共に渡満し、両親の勤務の関係上満州各地を転住し、成長と共に佳木斯に落ち着き、満拓佳木斯地方事務所総務課に入社し、海野氏と共に働き、開拓団などの出張多く高粱酒を飲み、酔っては歌う好青年であった。両親は満拓に勤務して独身者のめんどうをみており、母親は寮母となり、寮の全員に慕われていた。

所長以下全員にまでやさしくしてくれた、ほがらかな、良き人であった。私は川端君とは同課であったことから、いつも飲食を共にする関係上、私も親のように甘えたり、わがままを言って困らせた経験を持つ。軍事教練や野球の試合後は必ず寮に行き、風呂に入った。私のことをアツクさんと呼び、川端君がアツクだよと教えても、すぐアツクさんになってしまう。そして笑いころげる、良き母親であった。

川端氏は各支所に長期出張することが多く、その都度、酒が強くなって帰ってきた。益満所長にかわいがられていましたから、戦後、新京でも同居してどこに

行くにも一緒であったことを思い出す。

私は開拓団に送る配給係をしていたので、酒があまっていたことがしばしばだった。川端氏は事務所と同棟の独身寮に住んでいたから、夜、酒樽を車に積んで運搬してくれて、左指で杯を持つまねの上手な人だった。土曜日は係長以下集まって飲むことが一番の楽しみだったことを思い出す。

引揚げ後は金沢市の消防署に勤務し、同郷の女性と結婚し子供にも恵まれ、模範的家族をつくり課長をへて署長で退職されたたまじめな人格者である。妹さんも引揚げ後、地元の人と結婚し幸福な人生をおくっており、なにかと兄の所に来る兄思いの女性である。

川端氏は満拓会石川県支部の幹部を務め、満拓会には必ず出席する。満州を愛すよき友であり、良き満拓人でもある。現在は、良き奥様と二人で金沢市粟崎の自宅に二人きりの悠々自適の生活をしている。

(東京都引揚者団体連合会)

理事長 阿久津 英雄)

波瀾の時代を流されて

三重県 川本 隆

一 師範学校卒業まで

私の祖父は、いわゆる小糠一升米三合持って、一代で自作農となった人だった。天秤棒一本で四キロ南の上野の町で仕入れた酒を、山一つ越えた北の丸柱村へ持って行って売り、帰りに陶磁器を仕入れて町へ売り、その口銭で田畑・家屋敷を築きあげた。

祖父はやがて死に、祖母と働き盛りの両親、そして七人の子供で、子供もそれぞれ分担する仕事が決められていたが、子供を育てる両親の苦労は並大抵ではなかっただろう。

当時の義務教育は小学校六年までで、六年になると中学入試の準備教育が行われた。私も受けていたが、入試の前日には諸注意を聞いていつもより早く帰った。早速東の田んぼへ母の麦の中耕の手伝いに行った。ひ